

デューク・ジョーダン Duke Jordan (1922/4/1 ~ 2006/8/8 アメリカ合衆国ニューヨーク・ブルックリン生まれ)

黄金時代のチャーリー・パーカーやスタン・ゲッツらを支えた名ピアニスト、デューク・ジョーダン。

1960年、ブルーノートから『フライト・トゥー・ジョーダン』を発表しジャズの表舞台に登場した。

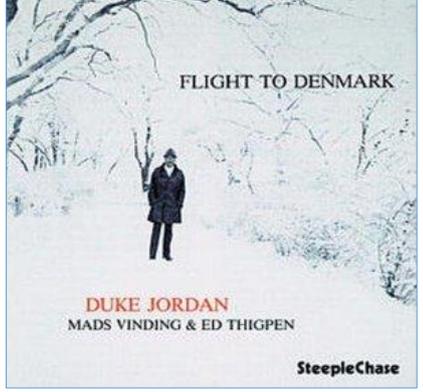
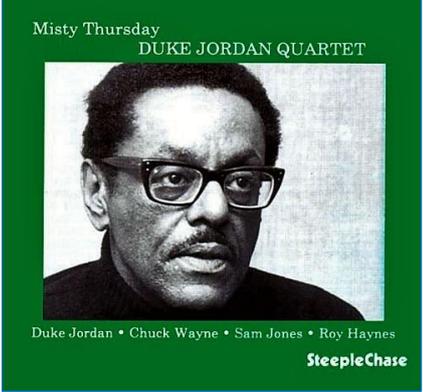
黒人ピアニストながら非常に端正な奏法で知られ、その独特な奏法から「趣味の癒し銀ピアニスト」と評される。

素朴で美しく温かさに満ちたジョーダンのピアノは、彼の温厚な人柄とも相まって聴く者に安らぎと癒しを与えてくれるよう。

一時音楽活動を休止していた時期もあったが、後年はアメリカからデンマークに渡って居を構えジャズ演奏を再開。

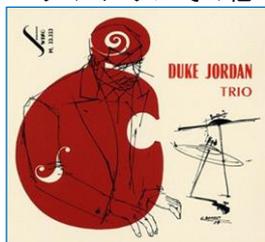
昨年創立50周年を迎えたコペンハーゲンのジャズ・レーベル、スティープルチェイスから数多くの傑作を送り出している。

※本日ご紹介する曲はNo.6を除きデューク・ジョーダン作曲によるオリジナル。

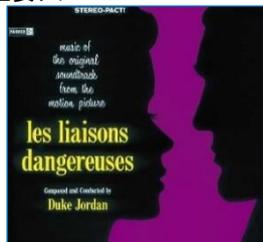
1		<p>JORDU (Duke Jordan Trio / JORDU (1954)) '4:45' Duke Jordan (p), Gene Ramey (b), Lee Abrams (ds)</p> <p>記念すべきジョーダン初のリーダー・アルバムの中のトップを飾る名曲。いちど耳にすれば忘れられないイントロと主旋律が強靭なタッチで綴られる、ジョーダンの代表曲。様々なジャズメンによって採り上げられ演奏されているが、特にクリフォード・ブラウン＝マックス・ローチ・クインテットの十八番であった。なお、この曲の正式名は”マイナー・エスキャンプ”であるが、別名”ジョードウ”の方がポピュラーで定着している。</p> <p>(Vogue)</p>
2		<p>Grad I Met Pat (Duke Jordan / Flight To Denmark (1973)) '5:03' Duke Jordan (p), Mas Vinding (b), Ed Thigpen (ds)</p> <p>デューク・ジョーダンと言えば誰もがすぐにこのアルバムを挙げる代表作。長期にわたる音楽活動休止から復帰を遂げた、第二のデビュー作とも言える。ワルツダンスを踊っているかのような滑らかなタッチとリズム、そして軽やかなメロディ。作曲家としてのジョーダンの豊かな才能とセンスが遺憾なく発揮された名曲。雪景色の中でジョーダンが一人佇む姿のジャケットデザインもアルバム全体の演奏内容と見事に融合しており、秀逸。</p> <p>(SteepleChase)</p>
3		<p>Jealous Blues (Duke Jordan Quartet / Misty Thursday (1975)) '5:32' Duke Jordan (p), Chuck Wayne (g), Sam Jones (b), Roy Haynes (ds)</p> <p>リズムセクションにチャック・ウェインのギターを迎えてのカルテット演奏。アップテンポの軽快な流れに乗って展開されるジョーダンのピアノとウェインのギターの掛け合いが楽しい。サム・ジョーンズのベースソロ中にスパイスを効かせるかのごとく入るピアノとドラムの演出も絶妙で、このアルバムのセンスの良さが表れている。</p> <p>(SteepleChase)</p>

曲名 (収録アルバムタイトル (録音年)) '演奏時間' *右下()はレーベル名

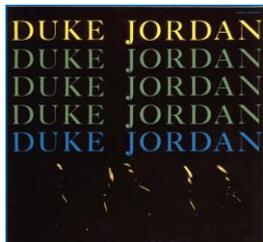
デューク・ジョーダン その他の主要アルバム



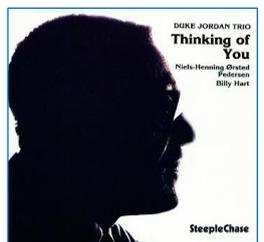
DUKE JORDAN TRIO



Les Liaisons Dangereuses



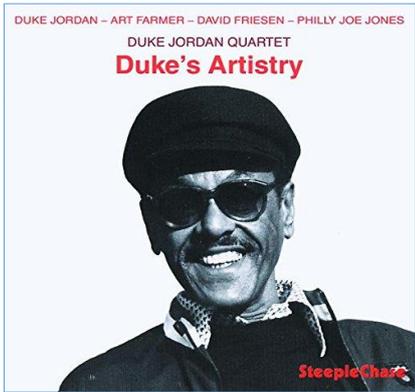
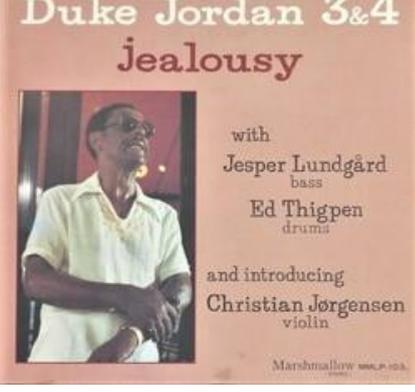
Trio & Quintet



Thinking of you

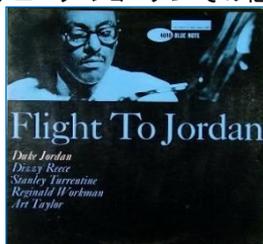


The Great Session

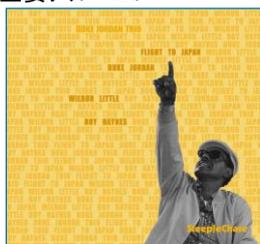
4		<p>Lady Dingbat (Duke Jordan Quartet / Duke's Artistry (1978)) '8:20' Duke Jordan (p), Art Farmer (fh), David Friesen (b), Philly Joe Jones (ds)</p> <p>アート・ファーマーの愁いを帯びたようなフリーゲルホーンとのカルテット。アルバムの中でも本曲は特にファーマーが美しい音色をたっぷりと、じっくりと聴かせてくれるバラードで、中盤から引き継ぐジョーダンのピアノもまた美しい。ジョーダンはファーマー以外にもチェット・ベイカーなどと共に多くのカルテット演奏を残しているが、柔らかなフリーゲルホーンとジョーダンの端正なピアノの共演による魅力は格別。</p> <p>(SteepleChase)</p>
5		<p>Change a Pace (Duke Jordan Trio / Change a Pace (1979)) '5:45' Duke Jordan (p), Niels-Henning Orsted Pedersen (b), Billy Hart (ds)</p> <p>「イントロの魔術師」とも言われたジョーダンならではのイントロの後に展開される、美しくも哀愁に満ちた独特の静かなメロディ。聴き込むほどに心に深く染み入ってくる、アルバム全体の印象を決定づける1曲。ジョーダンが何のペースを変えようとしていたのかは定かでないが、「チェンジ・ア・ペース」というタイトル通り、他の作品とはひと味もふた味も違う魅力を醸し出す傑作。</p> <p>(SteepleChase)</p>
6		<p>Lullaby of the Leaves (Duke Jordan 3 & 4 / Jealousy (1983)) '5:44' Duke Jordan (p), Jesper Lundgard (b), Ed Thigpen (ds)</p> <p>プロデューサーの意図により2トラックレコーダにミキシングしながらダイレクトに録音され、かつスタジオの雰囲気のできるだけ伝えるためミュージシャンの声ややりとりまで収録されている。紹介曲ではベースかドラムのいずれかは不明だがイントロのタイミングを逸してしまい、「Sorry」という謝りの声と共に演奏が中断。ジョーダンはこれを「気にするな」とばかりに笑い飛ばし「Here We Go」と演奏を再開する。ジョーダンの人柄と和気あいあいとした雰囲気が伝わってくる名演そして名録音。</p> <p>(Marshmallow)</p>

曲名 (収録アルバムタイトル(録音年)) '演奏時間' *右下()はレーベル名

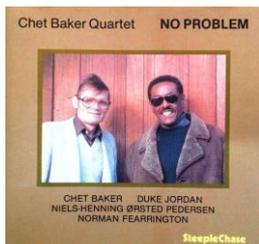
デューク・ジョーダン その他の主要アルバム



Flight To Jordan



FLIGHT TO JAPAN



Chet Baker Quartet
No Problem



Dug Watkins
Watkins At Large



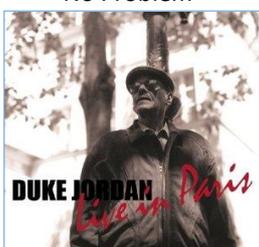
CHET BAKER TRIO
with DUKE JORDAN



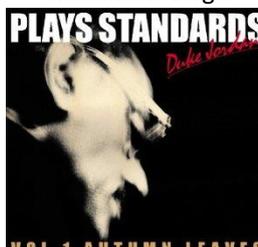
DUKE'S DELIGHT



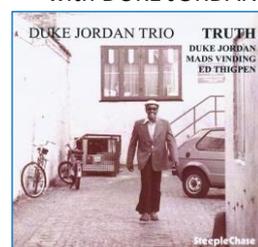
Beauty of Scandinavia



Live in Paris



Plays Standards



Truth